

||||||| 紹 介 |||||

古典経済学のもう一人の完成者：
シスモンディの生誕2百年

——ソビエト経済学者の一論文から——

見 野 貞 夫

昨年、1972年はリカード生誕2百年を記念した。本年はまた、シスモンディの生誕2百年にあたる。二人とも科学的系譜のブルジョア経済学の使徒であり、しかもイギリスとフランスという二つの先進国——という意味は、自力で固有な市民社会と、その上に開花する経済科学を育てあげたということである——で古典経済学をしめくくった思想家であり、最後の経済学者であった。リカードにつづいて、一年後に、同じ2百年を記念するのは二人の経済学史における位置を示すのに、いろいろな意味できわめてシンボリックである。また、いわゆる限界革命あたりからかぞえて、近代経済学生誕百年が意識するここ1、2年の学会状態とも関連づけみると、古典経済学者のこの最良の代表者たちの思想なり理論はいまいちど、丹念に分析・研究するに値するし、まさにこれを現代が要求しているように思われる。

以下、紹介する論文の叙述のなかにもでてくるが、リカードともども、シスモンディの理論史における位置を、マルクスの描写から、まえもってすこしばかり、引用して確認しておこう。

‘…私が古典派経済学というのは、ブルジョア的生産諸関係の内的関連を探究するW・ペティらしいの全経済学のことであ[る]。’（“資本論”第1編第1章）

‘商品进行分析して、2重の形態の労働に帰すること……は、イギリスではウィリアム・ペティ、フランスではボアギュイベルにはじまり、イギリスではリカード、フランスではシスモンディにおわる古典経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的成果である。起点の二人の間にあつた、正反対な社会事情をうつしだしている対照関係は、二つの経済学

をしめくりつつ、リカードとシスモンディの間に反復される'（『経済学批判』）。終点における対照関係では、同じくマルクスによると、'…ブルジョア経済学は、そののりこえない限界に到達した。まだリカードの在命中に、そしてリカードへの対立において、ブルジョア経済学はシスモンディなる人格から批判を蒙ったのである'（『資本論』第1巻第2版への'あとがき'から、）

また別のところでは、労働または資本という文句でリカードは両者の性質と、それが同一と考えられる素朴さがにじみだしているが、'シスモンディはこの矛盾を感じとることによって、経済学における一時期を画している'（『剰余価値学説史』第21章）。

以下の論文は、シスモンディの資本主義批判を主としてかれの恐慌論として議論しているので、この論点にしぼって、リカードとの対比においてシスモンディの座標を、いまいちどマルクスから確定しておけば、次のようにいえるだろう。多少長文になるがいとわず引用しておきたい。

'リカードは、ブルジョア的生産が社会的生産力の最大可能に無拘束な発展を〔意味する〕かぎりでは、生産の担い手が資本家であろうと労働者であろうと、その運命に心を煩わされることなく、ブルジョア的生産を支持したのである。彼は、この発展段階の歴史的な正当性と必然性を〔しっかりと〕つかんでいた。彼には過去についての歴史的感覚は欠けているが、それだけにかえって彼はその時代の歴史的な跳躍点のなかに生きている。'

'リカードは、ブルジョア的生産を、もっと明確に言えば資本主義的生産を、生産の絶対的な形態として把握している。したがって、その生産関係の一定の形態が、生産そのものの目的——豊富——と矛盾したり、それを拘束したりすることはけっしてありえない。彼がブルジョア的生産について驚歎しているのは、実際には、その一定形態が……生産諸力の無拘束な発展を許容する、ということである。それがこうしたことを遂行しなくなったり、そうしたことを遂行している内部に矛盾が現われたりする場合には、彼は矛盾を否定する。'

ところが、シスモンディはむしろ逆である。

'シスモンディは、資本主義生産に矛盾があるという根深い予感がある。すなわち、一方では、その諸形態——その諸生産関係——は生産力と富との無拘束な発展を刺激し、他方では、これらの関係が制約されており、使用価値と価値、商品と貨幣、購買と販売、生産と

消費、資本と賃労働などに関する諸矛盾は、生産力が発展すればするほど、それだけますます大規模になる、という根深い予感がある。特に彼は次のような根本的な矛盾を感じている。すなわち、一方では、無拘束な生産力の発展と、同時に諸商品から成っていて現金化されなければならない富の増加、他方では、基礎として、生産者大衆の必需品への限定という根本的な矛盾である。したがって、彼の場合には、恐慌は、リカードの場合のように、偶然ではなく、大規模に一定の時期に起こる内在的矛盾の本質的な爆発なのである。ところで彼は、生産力を生産関係に適合させるために生産力を国家の力によって拘束すべきか、それとも生産関係を生産力に適合させるために生産関係を国家の力によって拘束すべきか？ということ絶えず動揺している。そのさいにかれはしばしば過去に逃避し、過去の賛美者 (laudator temporis acti) になるか、あるいはまた、収入の資本にたいする関係、または分配の生産にたいする関係の別の規定によって諸矛盾を緩和しようとしているのであって、分配関係が別の規定からすれば生産関係にほかならないことがわかっていない。彼はブルジョア的生産の諸矛盾を的確に批判しているが、しかしそれを理解していない。したがってまた、その解決の過程も理解していない。だが彼の場合、根底にあったのは、実際には、資本主義社会の胎内で発展した生産諸力、すなわち富をつくりだす物質的で社会的な諸条件に、この富の取得の新しい形態が対応しなければならないという予感であり、また、ブルジョア的形態はただ過渡的な矛盾にみちたものにすぎないのであって、そのなかでは富はつねにただ対立的な存在だけを保持し、同時にどこまでもその反対物として現われるという予感である。富はつねに貧困を前提とし、貧困を發展させることによるのみ、發展するものなのである’ (“剰余価値学説史” 19章)。

古典経済学終焉の時点における二国に関するマルクスの見解であるが、起点においてと同じ対照関係があって、実際マルクスも関説している。社会の物的諸条件、すなわち生産諸力、資本関係、そして市民社会の發展度なり成熟度につまるところ帰着することなのであるが、大まかにいって、ぶ厚い保守(弁護)的科学性と、脆弱な急進(革命)科学的ローマン主義として一般に特徴づけることができよう。ここで科学的なり科学性とは何か、ローマン主義の内容はなど、問題になるだろうが、別のところで述べたこともあって、ここでは論議するのにふさわしい場所でもないから省略する。一般的特徴づけを、ブルジョア科学の終点で裁断した発言がさきのマルクスからの引用であろう。

たしかに、シスモンディは科学的前進度そのものにおいては、リカードよりも高かった。

リカードが夢想だにもしなかった資本主義の史的限界や過渡的相対性を、かれなりの立場から、所定の理論構成をもってすでにみやぶっていた。しかし、その理論構成そのものがリカードとくらべて、こんどは貧しいために、前進度はそのかぎりにおいてひきもどしを喰わざるをえない。立場なり視点における急進的革命的な性格は、もう一つの、脆弱な貧しさともいべきローマン主義を、客観的には、保守反動性をさがたくともなわざるをえない。後向きの資本主義批判、過去の理想化、もどるはずもない日々へのノスタルジャーなどがこれである。ドーヴァーをへだてる古典経済学最後の形態における独自の相異は、両国の発展度が示す相対的差異によるから、何も英仏だけに、またその時代にのみ特有なことがらではなく、今日でもよくみられる史例である。シスモンディ時代からほぼ半世紀たつて、かつてのフランスの役割を、いまや全西ヨーロッパにたいして帝制ロシアがはたし、紹述するところにてでくるように、シスモンディならず、ナロードニキ理論を生みおとすことになったのである。

リカードを記念する論文を紹介したのにひきつづいて、以下、シスモンディを、同じくソビエトロシアの論文の一つから、紹介してみよう。

その論文は、さきのリカード論と同一の著者のものである。

A. Аникин: Сисмонди и его роль в развитии политической экономики.

(К 200 летию со дня рождения), Вопросы Экономики, No. 6 1973.

* * *

現代との間にいくばくかの距離をもつとはいえ、このスイスの経済学者、シスモンディ (Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi) は、経済学史やその他多くの分野でなお、重要な位置を占める。

かれは1873年5月ジュネーブ近傍に生まれた。かれの伝記書によると、どちらかといえば、かれの偉大な同郷人ルソーと同様、性質や感情がジュネーブ人的であった。知性と作品の方向ではフランス的諸作品をフランス語で書きパリで出刊したので、フランスの経済思想の代表者のように考えられている。幼年時代をカルヴィーン派の独立した牧師家族のなかに生き平和な家父長的環境のうちに育だった。生涯にわたり、かれは、幸福は誇り高き勤労職人やフェルミエーの家庭のなかにあり、そして工場・商業施設・銀行などをもった大都市からのがれてでていくものだとした確信をもちつづけた。だが、その家父長的生活はかれの眼前で工業化により急速に消えさり、過去のものになったし、この歴史的過程のなかで独立の職人は貧しいプロレタリアになっていった。

かれの青年時代はちょうど、フランス革命の諸年代にあたっている。この嵐は、ジュネーブをとらえ、シスモンディ家をまずイギリスへ、次いでイタリアへ移住させ放浪を強いた。後、機会をえてジュネーブに帰るや、かれは一団の学者・作家仲間にはいった。それは、銀行家、政治家ネッケル、かれの娘マダム・ドゥ・スタール、文士、社会活動家などを中心にあつまつた。スタール夫人とこれに近い文学的ローマン主義はシスモンディにかなりの影響を及ぼした。ナポレオン・ボナパルトに敵対して、かれを専制君主、イタリア・スイス都市共和国の自由を侵害・掠奪するものとみなしたが、シスモンディにとって、こうした共和国は社会における政治機構の理想であった。がしかし、後年にはナポレオンにたいして示した態度をかえ、かれは、新帝国がかなり自由と幸福に関する漠然とした思考を実現すると期待した。西ヨーロッパ諸国における経済的激動期と目せられるこのナポレオン戦争後の時期に、シスモンディの思想は形成をとげる。かれは、ジュネーブですこし政治生活をおくつたが、やりとげず途中から自由な文士になり、大学の教職や官吏にはいちどもつかなかつた。なかなか興味あることには、当時ロシアの政府がシスモンディにビレンスキー（ビルニユスキー）大学の教授ポストを申しでたことである。これはかれの科学的業跡をひろく世間に知らせる効果があつた。しかし、思想家や作家の安定した生活にとどまろうとせず、かれは招へいをことわつた。同時代人の証言によると、かれは同情心のあつたおだやかな人間となつてゐた。マダム・ドゥ・スタールの生活環境を記述した著者は、かれをお人よしのシスモンディと呼んだ。作成才能にいちじるしくひいでてゐたシスモンディは、その後、広汎な文献的遺産をのこした。

作品についていえば、1803年の“商業的富について、または商業立法に適用する経済学の原則”(De la richesse commerciale, 2 vols, 1803) は周知の、最初のころの作品である。そこではかれはスミスの弟子にとどまり、スミスの普及者として登場するにすぎない。積極的に経済学に寄与した著書としては、“経済学新原理、もしくは人口にたいする関係における富について”(Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population, 2 vols, paris 1819) がある。この作品は7年後、第2版を出刊したが、そこには大変重要な補足が加えられた。最後に1836年、2巻本の“経済学研究”(Etudes sur l'Économie politique) が発刊。これは、既刊の作品に加える新しい思想は多くなく、ほぼ同じものであつた。生涯、経済学者というより、かれは歴史家とみなされることのあつたのは注目すべきことである。かれの歴史作品は、何巻かの“中世イタリア諸共和国史”(16vols, 1807~18) と、“フランス人史”

(31vols, 1821~44) から成る。不撓のこの作者には、社会学や政治学の作品もある。

経済学におけるシスモンディの位置はといえば、資本主義がいかにも繁栄にひたりかちほこっている時期に、小ブルジョアの立場からだとはいえ、この社会にふかく透徹した批判を与えたという点が注目すべく大切であろう。この立場はかれに、資本主義社会のなかに、同時代のかれの天才的競争者（反対者）たるリカードが無視してしまった矛盾と問題点をみさせるに十分であった。シスモンディはマルクス以前に、資本の社会秩序を永劫とみたり自然だと考えるドグマに疑問を公然と表明したはじめての経済学者であって、経済学のなかに、かれは、ブルジョアの富とその増加の仕方に関する科学ではなく、人間の幸福のために社会的メカニズムを完成させる任務をみたのである。かれの作品には、労働する人や勤労者の重苦しい運命にたいする真の同感があふれそしてゆたかに貫らぬかれている。古代ローマのプロレタリアという用語を再生し評定しかえて、新時代の社会経済諸文献にもちこんだのは、ほかでもなくかれである。

固有な経済分析の分野におけるシスモンディのメリットについていえば、かれははじめて十分に明確な形態でもって資本制再生産と経済恐慌の問題を提起し、大きな洞察力をもって、かれは後者のなかに資本主義の矛盾表出をよみとり、勤労大衆の刑鞭をみすえたのである。恐慌の主要因を正しく理解していたわけではないが、それにもかかわらず、かれは商工業の循環サイクルを直接に形成し恐慌をひきおこす要因産出の矛盾システムをすどく分析した。かれが指摘したいくつかの合則性や、因果関連はある意味でマルクスらしい恐慌論であり、この現象の具体的な解明がシスモンディの考え方の起点であった。全体としてかれの作品は、後の資本主義研究にとってきわだった役割を果すことになった。

ところでシスモンディのモデルとはこうである。生産の規動力と目的は利潤の抽出であり、資本家はこの担い手となり労働者からこれを奪いとる。主としてマルサスの人口法則にしたがって、かれにすると、労働の供給は固期的に需要を超過するので、生存ガツガツの水準に賃金をおしとどめることを資本家に保障する。そのために、生きるべく労働者は一日に、12~14時間も働かなくてはならない。かれの購買力は低く、しかもわずかばかりの第一次必需品にかぎられる。が、商品はますます多く生産される。機械の導入はこの不均等を強化するだけである。これは生産性を高め労働者を駆逐する。その結果、ますますもって多くの社会的労働がシャシ品の生産に向かう。この品目への富者の需要といっても不安定である。ここからおのずと、過剰生産がさけられなくなる。

“新原理”第2版は広い範囲にわたる作品であり、そこで著者は経済科学の全システム

を、新しい基礎の上のうちたてようところみた。かれはスミスの天才を正当に評価し、多くの点でかれにフォローしたが、結論なり実際の提言ではスミスと決定的に分かれる。各自に固有な私利を追求する経済人の活動はおのずと、社会的富の増大と一致するのだとは、シスモンディは考えなかった。

叙述の方法と形態の点でも、シスモンディは“諸国民の富”を回想している。経済論文にかぎらず、哲学—社会学の作品にもこれにはじみでている。ここには歴史、政治生活、文化などの史実があつかわれるが、シスモンディがスミスと区別される文献的スタイルは情熱性、人間的衝動などの点である。シスモンディは社会科学でも大きな博学をもっており、これは著書にもうつしだされている。

第2版ではシスモンディ見解の本性がでており、かれは1819～20年の諸事件（恐慌、財産不平等の拡大、貧困の増大）がかれの理論を確立させたと述べている。このほか第2版では三つの論文があらたに追加的に投入されたが、そこにかれはリカード、セイ、マカロックなどとの論争を通して、自分の立場を弁護・主張・仕上げている。論争は否応なく、最大限に明確かつするどくかれの考え方を鮮明にするのに役だった。生産と消費との間の均衡問題を解明する表題で一括される論文の主要テーマは恐慌であって、この部分を読むとかれの経済理論が十分に把握できる。スミスと同様に、ふかく独創的な思想は具体的資料の茂みにうちに、個別問題における史的補説や議論のうちに、このスイス経済学者の場合、かくれていたのである。

問題の作品は次の7部から成る。1部は科学としての経済学の対象と範囲を規定し、アリストテレスからリカードまでの学史を簡単に概説する。経済学の対象設定にあたり、かれは、人間の物的福祉に根本的に影響する要因として、国家を直接に導入する。かれの中心テーマは2部の“富形成と発展”である。それは伝統的なロビンソン物語からはじまり、資本制社会の所得分配の分析をもって終わる。そこに価値・剰余価値論の要素が散在する。発展し成熟した資本制社会における労働生産物の実現困難と不確実性とは、ちがった現点から何回となく復帰してくる、かれの主要テーマである。3部と4部では、それぞれ農業問題と商工業問題が論ぜられる。ここでかれは精力的に、封建的土地利用の形態や資本制形態と比較して、小土地所有生産者による耕作の優超点を強調している。またリカード地代論も批判。工業に関しては、恐慌論を展開するとともに、賃金・利潤・利子などの基本的所得形態を論ずる。所得論はスミスとそうはちがわぬ。5～6部では、財政・貨幣・信用の諸問題を取りあげる。7部は人口問題がテーマ。資本主義のこの根本問題にたち帰り

プロレタリアートというコトバが言語学上、無拘束な生殖と結びついている点を想起しつつ、資本主義のもとでは以前、人口増加を制限し人口—生活手段の一致を保障していた自然因が消失してしまったのだと語る。プロレタリアは、家族構成と生存手段を比較する経済的・道徳的刺激をもち合わせず、かれらの子供たちも、自分と同じように生きるだろうと考えてしまっている。資本主義の貧困の原因をシスモンディはここにみて、それを治療すべく、かれなりの改革提案をもって本書は終わる。

スイスやフランスにかかわっていたとはいえ、研究資料の大部分を、当時のイギリス経済からかれは汲みだした。ほかの諸国にさきがけて資本の軌道にはいったイギリスには、資本制合則性や欠陥が完全な形態であられると確信していたからである。この場合、かれはイギリス秩序のスイス・フランスにおける普及＝定着を細心に追求するのであるが、同時に賢明にも、その破壊的側面とたたかう手段をも探求している。資本制矛盾の小ブルジョアばりの反映を内蔵するかれの理論は、資本主義発展の論理を否定しようとするかぎりにおいて、客観的には反動性格を払拭しえない。従前のブルジョア経済学、とくにスミスからシスモンディは正しい構成と相ならんで原則的誤謬を体得した。が、結局、かれの功績は小さくはない。シスモンディの科学的寄与を評価するにさいして、レーニンの次の見方が想起できよう。レーニンのいうには、史的業績というものは、当時の要求に比較して活動家が何を与えなかったかという理由によってではなくして、先人者にくらべてかれが新しい何かを与えたことで判定できるのである。この意味で、シスモンディが十分に科学的な分析を与えなかったからといって、かれをせめるわけにはいかないのである。他面、シスモンディ理論に与えられる評定の反動的というコトバに関して、同じくレーニンの説明を聞けば、こうである。すなわち、この用語は歴史哲学的意味で用いられるのであって、生きのこりの秩序でその構成見本をとりあげる理論家の誤りのみを特徴づけるのもっぱら適用されるのであり、理論家たちの個人的素質やその綱領には何一つかわりはない。コトバのありふれた意味で反動的たるのはシスモンディもブルードンもそうではなかったことは、すべての人に周知のところであると。シスモンディはといえば、多くの点でかれは進歩的な思想家にして人間であった。このことは何よりもまず、歴史過程がますます先進的な社会制度によって交替していくと理解した点にあらわれる。実際、シスモンディは、社会発展にどのようなパースペクティブをもたないリカードやその後継者と論争して、かれらに考えさせるべき問題点を提起した。つまり、資本主義がその交替した社会よりもいっそう進歩的だという理由のもとに、真理に到達したとか、貨幣には欠陥がな

いとか、そういうことができようかとかれは反問する。ここからも、たしかに社会の構造的性質を理解してはいないとはいえ、かれが資本主義をいっそうヒューメンな社会制度をもってとりかえられるはずだと予見していたのは明かである。

シスモンディはリカードともども、マルクスの先行者であった。が、マルクス経済学の軸心は剰余価値論であるが、この分野ではかれは大した独創性もなく、本質的にはスミス以上に進んでいない。だがしかし、資本主義批判論とか恐慌論とかになると、マルクス主義における若干の側面を形成するのに、疑いもなく、一定の役割をはたしている。マルクスの多くの作品には、このジュネーブ人へのふかい内容にみちた評価が目につく。“哲学の貧困”でかれは、シスモンディをかなり有名な経済学者と位置づけるが、消失した生活形態への復帰を目ざすかれの後向きの性格をみぬいていた。“共産党宣言”でマルクス・エンゲルス両人は、小ブルジョア的社會主義に言及して、小ブルジョアの二面性を指摘して、シスモンディを、この種の文献でならフランスのみならずイギリスでも主要なものだといった。“経済学批判”でもマルクスはシスモンディに、ちがった現点からアプローチする。古典経済学に関して、イギリスではペティ、フランスではボアギュイベールからはじまって、それぞれリカードとシスモンディに終わるほぼ、百年間の歴史にあった科学的系譜の呼び名であるとして、マルクスは、リカードが古典学派に属して、それを完成させたのだとするならば、これを補足して、むしろ疑問を表明し批判を加えたのがシスモンディだと、古典経済学の最後の二人を位置づけた。“資本論”でも、リカード存命中にすでに、シスモンディの人格でブルジョア経済学批判がおこなわれたのだという文節がある。こうしてシスモンディは、古典経済学に原則的に新しい質を与え、そのなかにとどまると同時に、そこから脱出してしまった。かれは後の学者にとって、実の多い創造性の源泉になったのである。“剰余価値学説史”でも、シスモンディ評価は高く、ローザの表現をかりると、’基本点で十分な’評定をマルクスは与えた(“資本蓄積論”)。シスモンディは、資本制生産に内在する無限な一定の拡大傾向と、同じ諸関係が課する制限との間の矛盾を感じていた(学史家Ch. ジートとCh. リストはマルクスに与えたシスモンディの影響を重視し、両者の原則的相異を過少評価している)。この矛盾は、生産-消費のひらきの姿で、そして有効需要の極度に限定された形態であられる。この衝突から脱却をはかるべく、その処方箋をしばしば過去への復帰のなかにも求めた。そのところでマルクスのつづけていうには、しかしながらシスモンディにあっては、根底的に實際上、ぼんやりした予感が存する。つまり、資本主義社会の胎内に発展する生産力、富創造の物的社会的条件に一致しなければ

ならないのはこの富領有の新しい形態であること、ブルジョアの形態はたんに富が対立する存在となり、あらゆるところで同時に固有な矛盾としてあらわれるところの過渡的な矛盾にみちた形態であること、こういう推論である。これは——貧困を前提とし、貧困を發展させることによってのみ發展するようなそうした富であると。更に、マルクスによると、シスモンディは資本蓄積の一般法則を感じており、シスモンディにとっては、恐慌とは、リカードのもとであったような偶然のものではなくして、嵐のように激烈な形態で解決をとげるものであり、広い領域をとらえつつ、一定期間を通じて現象する、内在矛盾の本質的發現であると。

前世紀90年代にシスモンディの名前と考え方は、自由主義的なナロードニキにたいして、革命的マルクス主義者がおこなう闘争とともにうかびあがり、その標的となった。この闘争はロシアの革命的社会民主主義の形成において重要な役割をはたしてきた。シスモンディ研究の意義は明白である。ロシアには資本主義の發展はなく、貧しい国内市場でも、ほかのいっそう發展した諸国によって掠奪される外国市場でも。そうしたロシアには資本主義を経過しないで農民共同体社会主義へいたる特殊な道を教えるのがナロードニキである。この小ブルジョアユトピアはシスモンディによく似た見解に立却する。両者が考え方として類似しているところから、ナロードニキ批判の迂回方法として、レーニンがシスモンディ批判に“経済学的ローマン主義批判によせて”といった一著部分をさいたほどである。

社会科学におけるシスモンディの功績を、レーニンは、イギリス古典経済学とはちがって、静的に一定の階級関係をもった既存の制度としてではなく、大量の小生産者が苦悩しつつ分解をとげていく動的に生成・發展する制度としてとらえた点に求める。もう一つの功績は、かれがスミスに劣らず、商品価値のなかに、賃金と、資本家・土地所有者の不労所得（かれは超過価値と呼ぶ）を明確に区別し、この両項目への付加価値の分割を、所得論、国内市場論、実現理論に結びつけようとしたことだ。この点は、シスモンディ評価なり、かれの教義とロシアナロードニキ教義との間の連関を明かにするにさいして、大変に重要であるとレーニンはいう。シスモンディは、個別資本家のかかわる水準であらわれる資本主義の搾取本質を、自分の理論では、賃金労働者、ブルジョア生産方法の發展におけるマクロ経済の矛盾と結びつけようとする。方法論として、かれが現象の客観的研究を、モデル批判や主観恣意的記述におきかえようとかわだて、史実研究には関心を示さずかれが説明に必要とした指針は進歩にたいするモラルだけであったと批判するのもまたレーニンである。

実現と恐慌を含む再生産の問題をレーニンが議論する場合、その基礎にあるのはほかでもなく、マルクスの与えた価値—現物の2構成から成る総合的分析である。シスモンディの誤りを、かれが反論・批判したはずのスミスのドグマ中にあるとレーニンはとらえたが、そのドグマによると、社会的全生産物は国民所得（可変資本と転化形態の剰余価値）に分解し、不変資本部分すなわち社会的再生産の過程で消費される生産諸手段の価値部分、これはあと方もなく消失する。同一の視点からすれば、ただちに商品流通なり国内市场から、巨大な諸手段の流通を排除して、社会的生産物を消費財に解消してしまう。が、このアプローチはシスモンディにとり、蓄積分析の可能性もとざしてしまった。かれによると、労働者は生活手段に全賃金を支出する。所得中の労働者の割合は減少。だが、資本家は超過価値すべてを支出しない。また所得中のその割合は増加する。この増加分を蓄積し投資すると、それらは実現問題をばいっそう尖鋭化することになる。シスモンディによると、蓄積を速めると、恐慌を通して資本主義は破局に面するから、蓄積を制限することだけが黙示録の終止符をばひきのばすことができる。レーニンのいうには、蓄積が急速になればなるほど、あるいは生産が消費をこえることが大きければ大きいほど、ますますもって好ましくよいと古典学派は教えた。蓄積をこのようにみるのは古典学派からとってきたものだ。古典理論は、富の増加が速いとそれだけ、ますますもって完全に労働生産力と生産の社会化が進展し、労働者の状態もいよいよよくなるのだと説教する。これにたいして、ロマンティカーは、逆のことをいい、弱い資本主義大衆に、期待をかけてその停滞をよびかけるのだと。

レーニンも述べているように、現代でも大きな意義をもっているのはシスモンディの恐慌論批判である。恐慌のない経済発展の可能性を示す抽象的な実現シェーマと、過剰生産恐慌がさけられないとするテーゼとの間の矛盾を、マルクスのなかにみようとす批判家にレーニンは答えを与えた。資本主義の継続的に発展する抽象的な可能性は、この可能性がするどい矛盾——その主要な形態が恐慌である——を通してのみ実現されることを排除しないばかりか、むしろ前提するのである。問題を弁証法的な観点からみるべきであり、形式論理からみてはならぬ。レーニンはマルクス恐慌論の原則的な特質を示したが、その説明とは、生産の社会的性格および領有の私的性格と、シスモンディの過少消費説との間の矛盾を重要点とするものであった。不十分な消費はそれ自体、恐慌を説明するものではないけれども、もっとも重要な役割をはたす。理論も史的経験も、生産は低い生活水準のもとでもいちじるしく増加するものだというを示している。

恐慌は生産—消費の矛盾だけからではなく、資本主義の基本的矛盾から、もっと複雑な要因全体から生ずる。したがって、資本主義の内部でそれに手をつけずに、恐慌をとりのぞくことは何としても不可能である。現代の政府がとる恐慌対策はシスモンディの幼稚なプロジェクトに比べて、そのスケール・作用度において比較にならぬ。そうだからといって、この対策とて、恐慌という病をこの制度からとりのぞくには無力である。できるのはただ、ある程度、周期的な循環・運動の形態をかえることだけである。恐慌は資本制発展の合則的形態、矛盾の一時的解決、一つの満足できる状態からもう一つの状態への移行形態であり、サイバネティックの用語でいえば、資本制経済が大量の障害やラグをともなって作用する逆関連のもっとも複雑な自動構成システムであり、しかも中央からの規制のないシステムであるとする、このようなシステムの自動構成が生じるのは trial and error による。恐慌はいわばこの trial and error であって、その代償は社会にとって異常に高くつく。20世紀のはじめに、マルクス経済学にとって重要な理論的問題であったのは独占段階の合則性である。それは資本蓄積の新しい形態と傾向、帝国主義下のこの過程の矛盾解明をテーマとする。1913年にはローザの“資本蓄積論”がでたが、これは革命的マルクス主義の立場から書かれたものだった。資本制的な生産・蓄積の可能性と限界を最初にみたのがシスモンディであり、かれの考え方はローザのなかに再生し、重要な位置を占める。それはもののみごとに、リカード学派やセイとの論争の経過中にシスモンディの長所を示した。その長所をローザは次の諸点にみた。1. 資本制拡大再生産を平坦な技術過程として理解することへの反論。2. 資本のもとでは技術的進歩はどうしても反労働者的になること。3. 社会形態の史的発展をブルジョア体制にのみ限定しないこと (“資本蓄積論”)。シスモンディとセイとの論争についていえば、ローザは双方の立場がもつ限界を定式化する。彼女によると、結果はどうなるかといえば、論争が結局、2重のとりちがえ (quid pro quo) におわり、その場合、一方の側は恐慌から直接に蓄積の不可能なことをひきだすのであるが、他の方は、商品交換からして、およそ恐慌はありえないと結論する。資本主義発展のいっそうの進行はこの2つの結論を不合理にも (ad absurdum) にみちびださずにはおこななかったと。(前掲書)

ローザは、実際、純粋資本主義社会における資本蓄積は理論的には、不可能である、と考えるシスモンディのテーゼを採用するかたわら、マルクスの数式の基礎にあるこの抽象を、血のけのない理論的フィクションと呼んだ。そこで問題点として生じてくるのは、マルクスがあたかも実現の分析をして恐慌はありえないということを示したのだとする結論

なり解釈である。ローザは、シスモンディと同じように、資本主義がスムーズに継起的な発展運動をとげるためには、前資本主義経済の分解が必要なのだと確信していた。

第2次大戦後、マルクス主義は資本主義の経済成長にパースペクティブを与える分野において新しい問題の前にたたされることになった。反帝国主義闘争の戦略戦術のために、こうした結論の重大性は評価しても評価しすぎとはならない。が、シスモンディやローザのような、内的力と源泉によって資本主義のふかい発展の真の潜在力を過少評価する思想家の見解は史的意義をもっているばかりではなく、最良の道義的動機からも重みがある。エヌ・イノゼムツェフの表現をかりると、40年代末から50年代にかけてかなり普及していたのは、資本主義経済の規模や可能な発展テンポといった問題に関する信のおけない考え方である。こうした考え方の著者は本質的に、レーニンの次のような指摘、すなわち帝国主義に特徴的なことは、進歩と停滞の2つの傾向の対立であって、この傾向のうち、第2のもの存在の以前よりもいっそう急速な増加を排除しないという指摘を無視している。資本主義生産力の自動閉塞への方向づけ、1929—33年恐慌と同じように、もっとも悲惨な世界経済恐慌への方向づけは、客観的に新しい条件のもとで生じてそこで50年代あたりに世界舞台に在る階級諸力の状態を、正しくなく評価することになった。それは一定の無気力のために世界革命過程のいっそうの発展といった事業で成功するに必要条件となる、あるあの異常な激変を期待することにより、正当化するのであると。

最近、内外の経済学者により、資本主義の真の発展傾向を研究すべく、多くのことが提起されている。が、資本主義が歴史的に破産するのは、それがもはや発展しないからではなく、この発展が矛盾を生みだし、その矛盾が変革の物的政治的条件をつくるからである。

スミス・リカードの古典学派や英仏両国におけるそのエピゴーネン、マカロックやセイなどを批判するひとりがこのシスモンディである。また若干の問題ではマルサスに同調していたとはいえ、他の諸問題に関しては、かれは決定的に意見を異にした。古典学派の急進的傾向にかれが合わぬ主要な論点はこうである。生産諸力の急速な発展それ自体が資本主義を正当化すると考えるリカードとちがって、かれはその意義を人びとに福祉をもたらすかぎりにおいてみとめ、経済的に進歩の成果をいっそう公平に分配する方途を提供すべく期待した。したがって、経済学はシスモンディにとって、どちらかといえば、実証科学というよりはむしろ規範科学として位置づけられるのであり、その任務は現実をよい方向に変革することである。リカードにあっては否定するところであったところの、経済学における道徳的要素をかれは強調し、その科学の技術化や形式化には断固反対した。蓄積を

資本主義分析のキー問題と考えて実現問題を看過するスミスやリカードの学派と対立して、シスモンディは生産—消費の矛盾を前面にうちだしたが、これは市場論や実現問題にかかわる。リカードとかれの後継者にとって、経済的進歩は、均衡状態の無限の連続であり、ある状態からもう一つの状態への移行は自動的な適応をもっておこなわれる。が、シスモンディはこれに反して、移行そのものに着目した。セイの販路法則、あるいはたんにセイ法則と一般に名づけられる考え方、すなわち需給の自動的一致、一般的過剰生産の不可能というテーゼに、シスモンディは抵抗する。

ところで、前述したことから次のことがでてくる。すなわち、レッセ・フェーレ原則や国家の経済への不干渉原則を否定し、私利の追求が社会の利益につらなると教えたスミスの考え方にも、シスモンディは異議をとる。かれによると、自由競争は破滅的な経済社会的結末をたどるので、富の少数者への集中とか経済恐慌の結果、ここに立法府から間接的にだす方策すなわち主人と労働者の間にもっぱら正義を実現すべく、その実施にたえるプログラムが必要であり、前者が後者に与えてきた害悪の責任をとらねばならないと。改革提案は、企業家による社会保障の実施、労働時間の制限、最低賃金の確立に帰着する。労働者が利潤分配に参加するものぞましいと、かれはいう。当時こうした方策は進歩的にして危ぶなかった。社会主義的と思われた改革を、間もなく資本はうけ入れた。それはけっして資本をほうむるようなものではない（シスモンディの経済改革論については、たとえば Mao-Lan Tuan: *Simonde de Sismondi as an Economist*, N. Y., 1927, p.168 に指摘がある）。シスモンディは空想社会主義を支持せず、改良主義的な国家干渉を教え、当時の労働者を何がしか仕合わせにしようとしたので、労働立法の先駆者とみなされる。

シスモンディは、前向きではなくもっぱら後向きに姿勢をとり、労資間の調和をはかる別な形態をみずに、手工業職場に類した封建的な制度に注目しこれを提唱する。機械が人びとの生計の資をうばわないように、かれはイギリスに小所有を再生し、技術的進歩をいっそう同等にそしてゆっくりしたものにしてしようとする。このローマン主義は、当時、他の諸思想と区別される特異なものであっただけに、リカードやセイとの論争においても、かれはひとりぼっちだったけれど、よく孤戦奮闘した。かれの後継者は、経済学史でこれといった足跡をのこさなかった。後継者はむしろなく、シスモンディ主義といった一人の論者の名だけがあげられる。シスモンディはスクールをつくらなかったが、かれの影響は遠くのびて多面的であり、ゆっくりとあらわれた。小ブルジョア社会主義に一括される社会思想にかれの与えた影響については前述したので別にするも、かれの足跡は19世紀の非

非プロレタリア変型にもある。たとえば、キリスト教社会主義、前世紀後半の国家社会主義。19世紀40～50年代にロードベルトウスがそれをもってたちあらわれたところの資本主義秩序およびブルジョア経済学の批判と、シスモンディ主義との間には明白なアナロジーがあり、その一つ、両者とも労働者階級の貧困のなかに恐慌の原因をみたのである。

ブルジョア経済学にシスモンディが影響しなかったことについては、いくつかの原因があるが、何よりもまず、ブルジョア学者をたえずおじけづかせたかれの資本主義批判論、マルクスに近いかれの定式化があげられよう。また、19世紀半ば、イギリスでもフランスでも、古典経済学はそのエピゴーネンによる俗流化が支配的になり、70年代における主観主義の登場は経済学を、いっそうシスモンディとは無縁な、否、敵対する方向へと決定づけた。この事情のほかに、シスモンディの考え方がアカデミックでなかった点もみのがせない。こうして19世紀末の経済学の新しい潮流にとっては、シスモンディの見解——労働価値説（未発展ではあるが）、労働搾取論、恐慌問題、社会的道徳的アプローチを説く方法論、こうしたものはすべてうけいれるところではなかった。

さきのジード・リスト兩人によると、シスモンディはまずもって、歴史学派のいおうとすることを一足さきにいつてしまったので、歴史学派の創始者はかれを、社会主義者とみだてた。新歴史学派は、かれの考えに当然にふさわしい評価を与え、そのなかに自分の最初の代弁者を見いだめたのである。まずもって、ここにシュモラー (Gustav Schmoller) がいおうとしていることは自分の見解とシスモンディ改革案学説が結びつくという点である。そのために、うら若いドイツ歴史学派は、大学の教壇から社会主義を教えるという意味で、半ば皮肉くられた '講壇社会主義' という名称をいただいたのである。さてシスモンディと '講壇社会主義' との共通性はといえば、次の点にある。1. 資本主義の道徳的非難にとどまって、根本問題のはずの私有に何らふれない。2. 自由放任を拒否して積極的に国家の社会経済政策を要求する。3. 経済学における '不毛な抽象' を批判し、経済現象の歴史経験的研究方法を確立。だがしかし、他面、両者の作品や活動にはおおうべくもないふかい相異がある。シスモンディの小ブルラディカリズムとシュモラー派の資本主義弁護論のちがい。とくに、マジナリストと同様、歴史学派には、シスモンディにまつわる労働価値説や剰余価値論はとうていうけいれられない。

ブルジョア経済学にたいするシスモンディの直接の影響はこれ以上ふれる必要はないとしても、その見解の足跡、研究精神の類似性は、19世紀末から20世紀はじめにかけての、正統派教義にたいする異端としてあらわれる。その異端とは次の2様である。1. 資本主